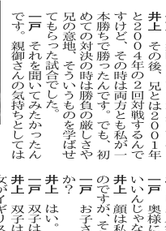
新春スペシャル対談 柔道ニッポン復活と

「私は欲張りなもので、自分が監督である以上は選手全員に金を取らせたいと思います」

井上康生（いのうえ・こうせい）氏略歴
1978（昭和53）年5月15日、宮崎県生まれ。5歳から柔道を始め、神奈川県の東海大学付属相模高校から東海大学へ進学。2000年のシドニー五輪では、100㎏級で金メダルを獲得。その後、01年、03年の世界柔道選手権でも優勝を果たす（99年を含め3連覇）。08年に現役を引退し、指導者の道に。12年のロンドン五輪後に、全日本柔道男子監督に就任。昨年のリオ五輪では、金メダル2個を含む52年ぶりとなる全7階級メダル獲得に導いた。20年の東京五輪でも監督を務めることが決まっており、更なる飛躍が期待されている。東海大学体育学部武道学科准教授。



現役時代は、2000年のシドニー五輪で金メダルに輝いた

2012年に監督に就任してからは、選手とのコミュニケーションを重視している（左が井上監督、右はリオ五輪で金メダルを獲得したベイカー 茂和選手）

重量級の再建

一戸 明けましておめでとうございます。

井上 おめでとうございます。

一戸 本日はよろしくお願いします。

井上 よろしくお願いします。

一戸 私も柔道界の人間ですから、井上監督のことはよく存じ上げております。拓殖大学では柔道をやっておりましたし、現在は休刊しているのですが、「日本柔道」という専門紙も出しておりました。確か、井上監督を間近で見たのは、全日本学生の試合だったと思います。きれいな人が傍にいるなと思ったら、井上監督の奥様（東原亜希さん）だったんですよ。まずはリオデジャネイロのオリンピック、ご苦労様でした。

井上 ありがとうございます。

一戸 日本男子チームが金メダルゼロに終わった2012年のロンドンオリンピックから比べると、我々も溜飲の下がる思いでした。

井上 まずは年を振り返ってみますと、52年前の東京オリンピックでは、金メダル獲得という目的もあって、その時以来の全階級メダル獲得という結果ではありました。

一戸 男子は金2個、銀1個、銅4個という結果です。

井上 ですが、監督としては、今の選手たちの能力を見た上で、私自身はもっと選手の能力を引き出せたのではないかという思いがあります。幸運にも私は2020年まで監督を続けることができますので、その2020年までにその悔しさを晴らしていこうという覚悟でおります。

一戸 選手たちは皆々と、立派に戦い抜いたと思います。

井上 はい、選手たちはオリンピックまで様々な困難と戦ってきたと思うのですが、そういう真摯に打ち勝つて偉業を成し遂げたと思っているのが正直なところです。私自身は2012年から監督を引き受けさせていただきました。ロンドンでもコーチとして選手たちと戦ってきたこともあったんです。金メダルゼロという結果は自分自身の無骨さに愛然とした屈辱的な大会でありました。そのあとから、それを糧にしながら4年間戦ってきました。

一戸 その中で重量級100㎏超級には届かなかったんですよ。残念ながら金メダルには届きませんでしたが…

井上 重量級の再建においては、力を入れた部分はあります。ですが、100㎏超級においてはデイ・リール（フランス）という絶対王者がいます。とかくこの選手を攻略するという思いでやってきたのですが、重量級再建ということでは道半ばで終わってしまいました。ここからが、また我々の戦いだと思っています。我々にとっては金しかない。その思いしかないと思っています。

一戸 監督から「次に」つなげないといけない」という言葉を聞いて安心しました。というのは、私のように柔道をやったことがある人間から考えると、日本柔道には「二という気持ちがあります。やはり、日本の柔道というのは100㎏級、100㎏超級で勝つのでは、今回、監督は「次に」という気持ちがあります。やはり、日本の柔道というのは100㎏級、100㎏超級で勝つのでは、今回、監督は「次に」という気持ちがあります。やはり、日本の柔道というのは100㎏級、100㎏超級で勝つのです。銅メダルを取った選手も、敗者復活戦を勝ちたかったのが3人でしたね。しかし、金員が金を取れる力を持っていると思うんですよ。

井上 敗者復活戦の話ですが、一度負けてから銅メダルを自信を持って戦えるという気持ちになってもらいたいというのが、2004年アテネオリンピックの時の私でした。あの時は金メダルを目指して負けて、敗者復活戦に回ったんですけど、やはり心ここにあらずで、敗れました。

一戸 敗者復活戦の話が出ましたが、一度負けてから銅メダルを目指すというのは、やはりメンタル的に相当きついものですよね。

井上 やはは、金を目指した選手が、途中の過程で敗れて1～2時間で気持ちを戦う状況に取り戻すというのはなかなか難しいんです。それができなかったのが、2004年アテネオリンピックの時の私でした。あの時は金メダルを目指して負けて、敗者復活戦に回ったんですけど、やはり心ここにあらずで、敗れました。

一戸 金を目指してきた。

井上 「もう、回しまたやるのかよ」、取って銅だろう」という気持ちになってしまうのでしょうね。

一戸 「もう、回しまたやるのかよ」、取って銅だろう」という気持ちになってしまうのでしょうね。

井上 今回、敗者復活戦が始まるまでは時間が少し長くありましたので、まずは選手たちが冷静になる状況で待って話をしました。

一戸 どのように声をかけたのですか？

井上 私のような負け方、力を出しきれない負け方という言葉の意味は、生後悔することになります。ですから、「もしかしたらお前たちにとって4年後にオリンピックがあるかどうかはわからない。これで終わりかもしれない。これで終わりかもしれないだから、後悔なく最後まで戦い抜け。これでメダルが取れようが取れようが関係ない。だけど、絶対に後悔だけはするな」ということを伝えて送り込んだ部分はあったと思います。

一戸 代表としてというより、選手たちが日本代表というより、選手たちが人間として、選手たちがそれを自覚していたからこそ、苦しい場面でも戦い抜けたのではないかと思います。

井上 やはり、選手たちが、熟していたからこその、全階級のメダルだったと思っています。

一戸 井上監督やコーチたちの力もあったからのことと、選手たちのものすごい力があったからこそのものでした。

一戸 根性をメインに据えていたところはありますか？

井上 そこがメインだったものです。ロンドンオリンピックでは負けてしまった。敗因は何だったのか、我々なりにそこを少し分析していうえで、試合で想定される戦術的なことを、そのあたりを練習にもちこんでいくということにしてやってきました。

一戸 一方で、根性や精神論も必要ですよね。

井上 もちろん、それは格闘技の世界で絶対に必要な要素だと思います。これがなかったら、勝ち抜いてきませんでしたし、最高峰の大会でもあります。だから、最高峰の大会で戦っていくためには、「これ以上のことはない」と見ていてくれたんです。試合が終わって私が泣いていた時、柔道に対して非常に厳格な父に呼ばれて「お前の涙は何だ」と質問されました。「兄に対して非常に失礼なことをした」と言ったら、父は「それだったらいい」と、それが「悔し涙」だったら、「お前は何のために生きているのか」と言おうと思った」と言っていました。

一戸 素晴らしいお父さんですね。

井上 その後、兄とは2001年と2004年の2回対戦するんですが、その時は両方とも私が一本勝ちで対戦の時間負の歴史を学ばせてもらった試合でした。

一戸 奥様に似ていらっしゃいますね。

井上 顔は私に似たところもあるんですが、それがかわいいんです。

一戸 お子さんは女、男、女ですか？

井上 はい、女、男、女ですね。

一戸 双子は想定外でしたね。長女が「ギリ」という時に生まれましたね。長男は日本に帰ってきてから生まれました。長男は日本に帰ってきてからです。妻も私も3人きょうだいでしたので、子供はそれぞれ欲しかったんです。

井上 親御さんの気持ちとしては、やはり、女の子の子育ては、長男は柔道をいろいろやっていたんですよ。

一戸 長男は非常にきんちょうなのですが、やはり下のお子さんはいろいろ面倒を見ようとしてくるんです。ただ、扱いが非常に雑で、抱っこしたと思ったら、人形のようにそのままソファにバーンと置いてしまう（笑）。そのようにそのままソファにバーンと置いてしまう（笑）。そのような感じです。

一戸 いえ、家庭です。監督も家に帰ってきたりするんですね。

井上 家に帰ってきたりしていますね。ご飯をあたたかいうちに入れたり、ご飯をあたたかいうちに入れたりしていますね。

一戸 赤ちゃんを風呂に入れる時は、頭を持ってでしょう。監督は

海外修行の必要性

一戸 そうして日本柔道が強くなり、メダルを取り過ぎてしまうと、オリンピックの廃止理由にもなりはないかという心配もあると思うのですが：（笑）

井上 おっしゃる通りのことはあると思います（笑）。しかし、監督としては全階級制覇が目標です。

一戸 柔道という競技を世界に広めていくというこの話をしましたが、世界でこの柔道が行われていると、言葉の壁、非常に難しいと思います。

井上 166の国と地域が加盟していると言う話をしましたが、全日本がこれまでの柔道の発展において、ロンドンオリンピックの金メダリストを育成するところ、女子と日本が、つまり、ロシアと日本が、つまり、ロシアと日本が、つまり、以外は遅い国です。それは、本当に世界の柔道、スポーツになったという証にはなったと思います。

一戸 とても喜ばしいことですね。

井上 一流選家としては、非常に喜ばしいことではないかと思います。その中で、私は我々が監督として、世界の柔道、スポーツになったという証にはなったと思います。

一戸 とても喜ばしいことですね。

井上 一流選家としては、非常に喜ばしいことではないかと思います。その中で、私は我々が監督として、世界の柔道、スポーツになったという証にはなったと思います。

一戸 柔道という競技を世界に広めていくというこの話をしましたが、オリンピックの廃止理由にもなりはないかという心配もあると思うのですが：（笑）

井上 おっしゃる通りのことはあると思います（笑）。しかし、監督としては全階級制覇が目標です。

一戸 柔道という競技を世界に広めていくというこの話をしましたが、オリンピックの廃止理由にもなりはないかという心配もあると思うのですが：（笑）

井上 166の国と地域が加盟していると言う話をしましたが、全世界でこの柔道が行われていると言うと、言葉の壁、非常に難しいと思います